学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	梁　敏玲 【比較社会文化学専攻　平成23年度生】	中国華南地方の都市広州は、二千年に及ぶ歴史をもつ重要な港町であるとともに、首都から遠く離れた境界領域における王朝の統治・軍事の拠点として、独特の性格を付与されてきた。本論文は、広州のそうした多面的な特色に留意しつつ、城郭内とその周辺を含む都市の空間的構造を分析することによって、清代広州における秩序の形成及びその特質について考察を行ったものである。 第一章では、「城防」（城郭都市の守備・治安維持）という視角から、都市に駐留する諸系統の軍隊（八旗・緑営）及び行政官（総督・巡撫・布政使・按察使・知府・知県）の各々の空間的・機能的管轄範囲とその相互関係を検討し、諸系統間の相互監視をめざすシステムが次第に変容して総督に権限が集中してゆく過程を明らかにした。第二章では、県の補助官である典史の管轄する空間的範囲として、農村と区別された都市（城郭内とその周辺部を含む）の領域が行政区画として形成されてくる過程を考察した。 以上が制度的方面からの分析であるのに対し、第三章以下は、人の移動・定着に焦点を当て、都市における社会的結合という観点から、広州住民の都市空間認識を扱っている。第三章では移住民の土着化と同族結合の過程を論じ、清代中期以降、広州に移住した商人や幕僚による同族結合の動き及び土着有力者としての成長が見られたが、広州の都市社会の流動性に規定され、農村部と比べてその結合は緩かったことを指摘した。第四章では街区即ち街路を挟む近隣関係による社会的結合について検討し、広州では祭祀や自警団などの活動を担う街区の結合が存在したが、その結合は閉鎖的なものではなく、可変的で開放性を持つものであったことを論じた。第五章では、広州に駐屯する漢人・満洲人の八旗集団に着目して身分・エスニシティーの観点から都市の秩序形成を扱い、漢軍旗人が都市社会に比較的早期に組み込まれていったのに対し、駐屯の開始時期が遅かった満洲旗人との間では、エスニシティー上の相違が強く意識されていたことを指摘した。 補論では、19 世紀初めの小説『蜃楼志』を題材に、広州の都市空間に関する人々の意識を解明しようと試みた。
論 文 題 目	清代広州の都市空間と秩序	
審 査 委 員	（主査）　教授　岸本　美緒	
	教授　三浦　徹	
	教授　新井　由紀夫	
	教授　神田　由築	
	教授　宮尾　正樹	